



名古屋東海ワイズメンズクラブ

会長主題 「ジャンプ！」

国際会長主題 「命の川を信じよう」	Jacob Kristensen (デンマーク)
アジア太平洋地域会長主題 「変化をもたらそう」	David Lua (シンガポール)
西日本区理事主題 「Let's do it now!」	吉田 裕和 (京都トウビー)
中部部長主題 「知らせよう! ワイズの奉仕活動を」	早川 政人 (名古屋グランパス)
名古屋東海クラブ標語 『限りなき熱情を奉仕に』	

今月の聖句

しかし、弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。
(ヨハネによる福音書 14 章 26 節～27 節)

強調月間

5月例会等ご案内

◎5月第1例会

日程：5月13日(木) 18:45～

担当：鈴木孝幸君

会場：名古屋YMCA(池下)

また、食事はありません(ご注意下さい)

開会宣言・点鐘：太田全哉会長

五つの信条 長谷川和宏君 【但し唱和なし】

開会祈祷：木村真知子君

卓話：『プロ野球とアマチュア野球』

講師：片貝義明氏 1972年ドラフト2位で中日ドラゴンズ入団、2015年より株式会社矢場とん人事部長

諸連絡

閉会宣言・点鐘：太田全哉会長

◎5月第2例会

日程：5月20日(木) 19:00～

会場：名古屋YMCA

◎第24回西日本区大会

日程：6月5日(土)～6日(日)

会場：ウェスティン都ホテル京都

締め切りは5/10(月)です。クラブとしては参加人数が少なく寂しいので、ZOOMなら参加という方会長までご連絡下さい。

◎例会は新型コロナの感染状況により中止になる場合があります。会長からのメールにご注意下さい。

東海ワイズ五つの信条

- 一、自分を愛するように隣人を愛そう
- 二、青少年のためにYMCAにつくそう
- 三、世界的視野を持って国際親善を果たそう
- 四、義務を果たしてこそ権利が生じることを悟ろう
- 五、会合には出席第一 社会には奉仕第一を旨としよう

【出席率】 4月末一在籍者 20名
(内広義会員 2名)

出席者 17名 (Make up 2名)
出席率 94.4%

【特別ファンド】

4月ファンド 13,200円
合計 1,398,444円

4月第1例会報告

『もしもし、いのちの電話です』

講師：加藤 明宏氏



本日の講師は元名古屋YMCA総主事で昨年7月より社会福祉法人愛知いのちの電話協会常務理事・事務局長を務める加藤明宏氏。

いのちの電話は1953年ロンドンで始まり、日本では1971年東京から、名古屋では1985年から始まった。その創設には名古屋YMCAの多くの先達や仲間が関わった。

24時間いつでも相談に応じるという名古屋いのちの電話だったが、昨年はコロナ禍の下、大切な相談員を守ることも必要と、一時は一ヶ月お休みと言う苦渋の決断もされたが、今は週4日24時間体制と次第に元に戻りつつあるようだ。



相談員は自腹で研修費を払い、相談活動は交通費も自腹と全くのボランティア。これこそがいのちの電話を最も特徴づける第1の点。この点が欠

けたらこの相談事業は成り立たないのも事実。老人施設や障がい者施設の様な支援対象人をもつ社会福祉法人には多くの補助金が出るが、いのちの電話のような直接支援対象人を持たない社会福祉法人には微々たる補助金しか出ない現状があり、創設当時の関係者はこの点に苦勞されていたのを私も知っている。したがって民間の支援が何より必要な社会福祉法人と思える。



相談員は研修を重ねているとはいえ普通の市民というのが第2の大きな点である。それ故に相談はより傾聴に重きを置くのであろう。多くの相談事例から分かってくるのは、相談者の多くは孤独や寂しさの中にあり、何より人との繋がりを求めているとのことである。その意味では傾聴は重要であると改めて思った。余談だが、傾聴の聴という字は興味深い、耳と目と心を持って、その上に十字架を持っている。「聴く」とはそういうものだと思う。

かかってくる電話の件数は、毎日相談を受ける件数の10～20倍あることが調査の結果わかった。話を聴いて欲しい人のほんの僅かの人にしか応えられていないのが現状のようである。

いのちの電話事業はMovementの色が濃いですが、それを支える財政基盤の強化は今後もしいのちの電話の大きな課題ある。皆様のお支え、宜しくお願いします。(松本)

【出席者】浅野、大島、太田、神谷、木村、柴田、鈴木孝、谷口、橋爪、長谷川、松本、八木、山田、山村、鷺尾

4月第2例会報告

- ①5月第1例会について以下の通り確認した。
 日時：5月13日（木）18：45～
 担当：鈴木孝幸君
 講師：片貝義明氏
 テーマ：プロ野球とアマチュア野球
 会場は名古屋YMCA（池下）、食事は無し。
- ②5月第2例会は予定通り。
 日時：5月20日（木）19：00～
 会場：名古屋YMCA（池下）
- ③中部特別基金（仮称）について
 この件については、中部会長・主査の会が4月17日に開催され協議される。クラブとしては基本的に了解の方向、金額を含み中部評議員会に一任することとした。
- ④西日本区大会登録はコロナ禍を反映し、現時点では会長と鈴木孝幸君のみとなる予定。
- ⑤次期役員について協議し以下の通りとした。
- 会 長**：山田英次
副 会 長：橋爪良和、神谷正博
書 記：松本勝、真鍋孔透
一般会計：浅野猛雄
特別会計：中江正典、木村真知子
直前会長：太田全哉（会計監査）
担当主事：谷口みはる
メール委員：長谷川和宏
メネット連絡員：浅野猛雄
E M C：鷺尾文夫、太田全哉
国際・交流：橋爪良和、池野輝昭
YMCAサービス・ユース：
 柴田洋治郎、大島孝三郎、八木武志
地域奉仕・環境：
 山村喜久、鈴木孝幸、長谷川和宏
ブリテン・広報：
 松本勝、八木武志、長谷川和宏、浅野猛雄
中部EMC主査：太田全哉

⑥総会について

飲食・宿泊を伴う裸の会としては行わないことを確認し、総会のみとして7月11日（日）の午後に開催する。会場は今後詰める。

⑦6月担当者の件

コロナ禍の下、医師の真鍋君の参加は困難な状況であるので、ピンチヒッターを池野君が引き受けてくれた。講師はスタッフの橋本啓君の予定。

【出席者】浅野、池野、大島、太田、柴田、谷口、中江、橋爪、長谷川、松本、八木、山田、山村、鷺尾

『バスケットはYMCA育ち』

八木武志

コロナ禍で毎日が日曜日のステイホーム、やることはテレビをぼんやりと見るかナンプレの難問に取り組むか。椅子に座って過ごす毎日、なんとなく昔を思い出してMBAの八村や渡辺のプレーを見ながら名古屋YMCA少年部時代のバスケットボールクラブのことなどが思い出されます。

私が少年部のグループ活動に参加したのは高校1年のときで、グループ名は「どんぐり」、同学年のメンバーには浅野猛雄君（向陽高校）、鳥居良照君（旭丘高校）、山内一卯君（明和高校）、芦原浩君（明和高校）などで、浅野君、鳥居君、山内君はそれぞれ高校のバスケットボールクラブに所属していた。

リーダーは鈴木浩之さん（名古屋大学）でした。グループの活動で体育館を使う時に初めてバスケットボールを体験したが、手取り足とり教えてくれたのが浅野猛雄君（モージュー）でした。私のバスケの師匠はモージューさんです。

学年別のグループのほかに水曜日にバスケットボールクラブの活動がはじまり、中学生から高校生まで一緒に楽しくバスケの練習をしましたがこの時中学生には池野輝昭君や森本治行君（モリモトレオ）などがいて、練習後のYMCA食堂でラー

メンを食べるのが楽しみでした。いつも体育館の2階の観覧席で私たちの練習を見ておられたのがYMC Aホステルに宿泊されていた呉 茂一先生（名古屋大学教授・ギリシャ文学）で、食堂でカレーライスをご馳走になった思い出があります。（当時の食堂ではカレーライスは高く私達には手が出ません）

名古屋YMC A少年部のバスケットボールクラブは結構強くて大阪YMC Aに遠征して少年部と試合をした。この頃、名古屋YMC A主催の市内中学生バスケットボール大会が始まり、ゲームを観る機会が増え、バスケの面白さにのめりこんだ。

コロナ禍のため去年は中止となったが今年もまだ感染者の増加が止まらず、学校の部活動もままならない状況で開催が危ぶまれている。民間の団体であるYMC Aの主催で60年以上続けてきたこの大会は市内の中学生にとっても大切な大会、是非続けていきたい。

残念ながら歳をとってあまり動きまわることができなくなり、バスケは頭の中で楽しむのみとなったがバスケはYMC A育ち、開催されれば観戦には行きたいと思っています。

『書くということ』

柴田洋治郎

今回、「書くということ」という大上段に構えた表題にしたが、実は最近読んだ本で興味をそそられたのが、日本語の変遷や特徴に関するもので、自分なりに纏めようとしたが、日本の文化にも関連し、奥が深く、長文になりそうなので思い留まりこの表題となった。今回も独り善がりの拙い文にお付き合い願いたい。

いつもブリテン用の文章を作る時に迷うのは、経験談や明確なテーマがある時は別として、ブリテンのテーマは任意で選び出すので、的が絞りにくく、あれ、これ考えすぎてしまうことだ。

私は自分の流儀として、ブリテン用の文章を作る時は、最初からワープロには向かわず、事前に

選んでおいた興味ある事柄のキーワードに対してコピー用紙の裏紙に手書きで自由に肉付けしてゆく。この過程で話があっちこっちに飛ぶこともあるが、この時間が遊び心にもつながり結構楽しい。言葉の正確を期すため、ネットやウィキペディアで検索も試みるが、高齢になったので、頭の体操のため手で書くということも意識しつつ、知識を豊かにしようとも思っている。

さて、ワープロに転記してゆく段階では、ブリテン用の文章の字数はA4判2枚以内？が基準なので、ともすると長文になりがちな私の文章をできるだけそぎ落として、決まった字数に収めてゆく作業が必要となる。今回は字数を節約するため、「です・ます」調の丁寧語にせず、常体の言い切り型としたため表現が固くなったかもしれない。更に後で読み返すと、削ったことで説明不足だったり、表現が物足りなかったかなと後悔することがしばしばある。

誰もが経験していることだと思うが、小学生の時から使ってきたのに、迷うものがある。例えば句読点の打ち方である。文を区切る場所としての読点「、」文が切れる場所としての句点「。」。次に助詞である「てにをは」の使い方。例えば主語を表す「が」、「は」の使い分け。更に接続詞、副詞も多様でどれが適当なものか迷うことがある。一方、日本語独特で、話したり、書いたりする時便利なのが「あいまい語」である。私の場合、ある表現をするのに断定するのに自信が無かったり、内容を量したい時などに使う。これに関し、よく引き合いに出されるのが「いわゆるひとつの」という（ジャイアンツ）の長嶋用語がある。

最後に一言触れておきたいのが、冒頭に記した日本語の変遷に関する事で、日本語の進化の過程で万葉仮名、古事記、万葉集、古今和歌集等のジャンルや作品がよく取りあげられるが、日本文化の中で決定的な発明といえ「仮名」が発明されたことだと専門家達は言っている。確かにその通りだと思う。